

モバイル分野での技術力を活かし、 高まるMDMの企業ニーズに対応

スマートフォンやタブレットなどの携帯情報端末の企業ニーズが拡大していますが、それに伴い、紛失や盗難などセキュリティの観点からの管理の重要性も問われています。当社では、今後さらに進化が期待されるMDM(モバイル端末管理)への取り組みを強化すべく、モバイル機器ソフトウェア開発のノウハウを活かしたセンサーデバイス管理や、IT資産管理システムと一体化したサービスなど、お客様の独自ニーズにも対応できる競争力のあるソリューション提供を目指しています。

これからの普及が期待されるモバイル端末管理

近年、スマートフォンやタブレットが急速に普及し、市場も拡大しています。自由に持ち運びことができ、パソコンのような起動も不要で簡単に使うことができ、インターネットなどへのアクセスもできる機動性の高さは、大きな魅力です。とりわけ注目を集めているのが、ビジネスシーンでの用途の拡大です。顧客にタブレット端末の画面を見せながら、タッチ操作でより分かりやすく商品の説明をする、といった使い方もよく見かけるようになりました。モバイル端末への依存度の高まりに伴い、クリティカルな商品データや顧客データを外出先で活用する企業が増えています。スマートフォンやタブレットは、その携帯性の高さから紛失や盗難などのリスクも大きく、PC以上のセキュリティ対策が求められます。しかし、ハードウェアの進化や利用シーンの拡大ほどには、モバイル端末を管理する仕組みは進んでいないのが実情です。

当社では、MDM(Mobile Device Management)をテーマに

研究開発に取り組んでいます。MDMは、モバイルデバイスマネジメント、モバイル端末管理などと呼ばれています。スマートフォンやタブレットなどのモバイル端末をリモートからロックするなどのセキュリティの観点からのデータ保護や、不正なアプリケーションなどがインストールされていないかを確認するアプリケーション管理機能などを提供します(図-1)。

強まる機能の発展やベンダの独自対応

MDMは、現在多数のベンダから提供されています。最近では、Android端末の新機種やバージョンアップへの対応も進み、さらに、より使いやすくなるための機能を充実させたものなどが登場してきました。一方、MDM単体の枠を越えて、ウイルスチェックソフトウェアや他のシステムとの連携などを模索する製品も登場しています。最近の動向をまとめると、「より多機能」もしくは「他との連携でより使いやすく」という2つの方向へ向かっており、それぞれで競争に拍車がかかっています。中には、端末メーカーと連携して、OS

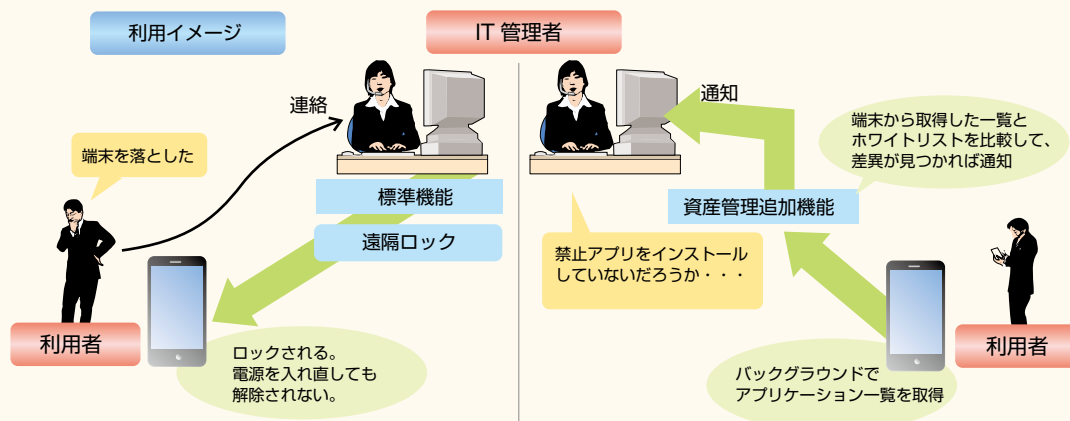


図-1 MDMサービスの概念

標準のインタフェースに加えて、独自のインタフェースを利用する機能を提供することで差別化を図るベンダも見受けられるようになりました。

一方で、1端末あたりのライセンス料は、ここ1～2年で数分の1と低価格化が進んでおり、コモディティ化も進んできています。このことから、単にMDMの標準的機能だけでは競争力を維持できなくなってきました。

MDMの一般的な機能としては表-1のとおりです。

表-1 MDMの標準的な機能

カテゴリ	代表的機能
セキュリティ対策	<ul style="list-style-type: none"> ・ リモートロック ・ リモートアンロック ・ リモートワイプ ・ 画面ロックパスワードの設定
端末機能制御	<ul style="list-style-type: none"> ・ カメラ機能制限 ・ Wi-Fi 機能制限 ・ Bluetooth 機能制限

カテゴリ	取得可能な主な情報
端末情報管理	<ul style="list-style-type: none"> ・ モデル番号 ・ OS バージョン ・ ビルド番号 ・ IMEI (端末識別番号) ・ Wi-Fi MACアドレス ・ Bluetooth MACアドレス ・ 位置情報 ・ インストールアプリ情報

モバイル機器でのノウハウとカスタマイズ力を活かす

現在、ベンダ間の競争激化によって機能追加のスピードも増えています。当社のMDMの研究開発への着手は、後発であったこともあり、多機能で競合するのではなく、システム連携やデバイス連携などによってビジネスユーザの真のニーズに即したものを提供していくことに重点を置いています。つまり、MDMをデバイスからシステムまでを結ぶブリッジのような位置づけとして、当社の強みである組込み・モバイル機器に関する技術や、お客様の業務内

容や運用に合わせて提供可能である豊富なSIソリューションを活用し、当社ならではの特色を持たせた製品・サービス展開を図っていくとするものです。

デバイス連携としては、「モバイル端末のシステム開発での技術力と経験を活かしたアプローチ」です。組込み分野でのネットワーク、リアルタイムOSからファイルシステム、ドライバ、ミドルウェア、アプリケーションまでの実装ノウハウを活かし、モバイル機器にとどまらず、センサーデバイスを含めたさまざまなデバイスを幅広く管理対象にできるよう、取り組みを進めていきます。デバイス連携を行うには、デバイス側にエージェント機能を実装する必要があり、スマートフォンやタブレット側にもデバイス側とのインタフェース機能などを実装する必要があります。当社は、組込み分野とモバイル機器でのノウハウを活かし、これらの機能をお客様の要望に合わせてカスタマイズができる点も特徴としています。

システム連携としては、「さまざまなシステムとの連携による包括的なアプローチ」です。現在は、IT資産管理・セキュリティの統合管理システムとの連携を進めています。当社が取り扱う本製品は、インベントリ管理、ソフトウェア配布、ソフトウェアカタログ管理、ライセンス管理、IPアドレス管理などの資産管理機能のほか、ファイル共有ソフトやメッセージングソフトなど利用させたくないソフトウェアの起動を禁止できるセキュリティ管理も実現しています。このシステムとMDMとの連携により、スマートフォンやタブレットなども管理対象として扱えるようになります。

このように、デバイス連携からシステム連携までの基盤としてMDMを活用することによって、他社にはない新たなソリューションの提供を目指しています(図-2)。

MDMは、導入コストを低減でき、すぐに利用開始できるクラウド提供が主流です。クラウドの方がサービス側としてもバージョンアップや機能変更・拡張などに対応しやすいという利点があります。しかし、企業によっては、オンプレミスでの提供を望むケースもあり、当社はそうしたニーズもターゲットと捉え、お客様独自のセキュリティポリシーに応じた運用管理から基幹システムなどとの連携まで、当社のカスタマイズ力を駆使して、お客様のニーズに応えていきます。

(エンベデッドシステム事業部 中本利明)

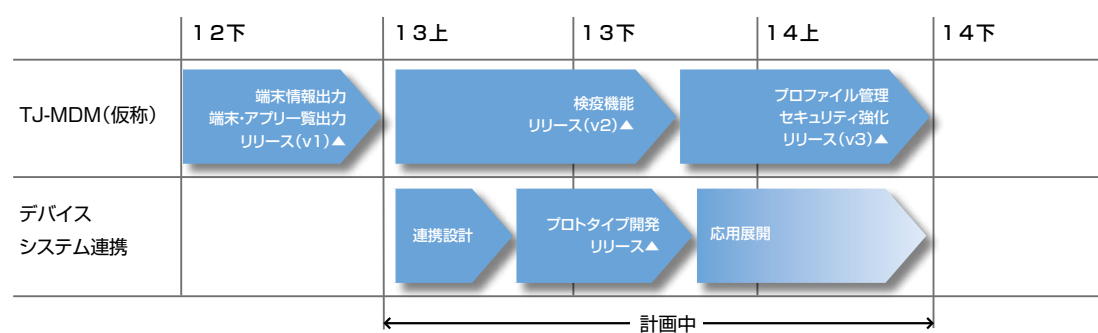


図-2 当社のMDM取り組みロードマップ